

昭和30年 ～ 34年

1955～1959



県道黒森線(柚川・松山線)開通式(昭和31年)

岩風呂はいかが

面河に2つの「山の家」

面河溪は、秋深まるにつれて訪れる観光客も日をおって増えているが、紅葉期を前に、このほど健康保険および学校共済組合の山荘が完成したのをはじめ、県下の景勝地として観光客の受け入れへ万全を期している。

健保組合山の家は県保険課自慢のもので、上浮穴郡面河村関門からおよそ二キロの紅葉河原に建設されている。総工費五百二十万円、建坪六・五坪、木造三階建てで二階が応接室、食堂、寝室など八室、二階が六、八畳の寝室二室、地下が岩風呂、洗面所。このほかに二段ベッド、四十名収容のヒュッテ、電話、電気冷蔵庫なども備えて山の情緒を味わえるように工夫されている。

公立学校共済組合山荘は蓬萊溪上に建設され、総工費は百万円、二十坪、組合員および家族三十名が収容できる。将来は卓球、麻雀など娯楽設備も整える。

いずれも今月初旬に完成したが、休日を利用して訪れる人たちにぎわっており、健保組合の方はすでに、二十四、五の連休は予約満員で申し込みを締め切るという盛況ぶりとなっている。このほか蓬萊溪から面河川の支流鉄砲川へ抜ける林道も営林省の手で進められ、完成も間近い。

(昭和30年9月20日)



観光客の受け入れ万全。完成した健保組合「山の家」

「面河山の家」に高山植物

八木さんの苦心で鉢植えずらり

財団法人「面河山の家」にこのほど、元松山北高講師八木繁二氏が集めた石鎚山系の高山植物、合計二百十種類が展示され、訪れる観光客を喜ばせている。この高山植物はこの「山の家」が数年前から計画している観光博物館の一部で、面河溪付近の植物はもちろん、海拔二千五百メートルを超える石鎚山頂付近にあるミヤマダイコンソウ(バラ科)、イシツチリンドウ(リンドウ科)、イシツチボウフウ(セリ科)をはじめ、面河溪にあるシダ二十三種類など、同山系の珍しい高山植物がほとんど集まっている。これらは八木氏が直接同山系を歩き回って集め、このほど四日間もかかって二種類ずつ鉢植えにしたもので、近く分布図も完成、展示される予定。

(昭和31年7月16日)



展示された珍しい高山植物

「青竹剣法」を楽しむ

面河村の小中学生スポーツで校外指導

上浮穴郡面河村中学校、洪草小学校のよい子たち約四十人は、夏休みに入ると同時に、毎晩洪草公会堂で「青竹剣法」のひとときを楽しんでいる。夏休みの間は夜遊びにふけりがちなところから、健全なスポーツで子供たちを樂しませ、指導しようという土屋洪草小学校長、久万署洪草駐在所坂本巡査の発意で、この夏から始まったもの。

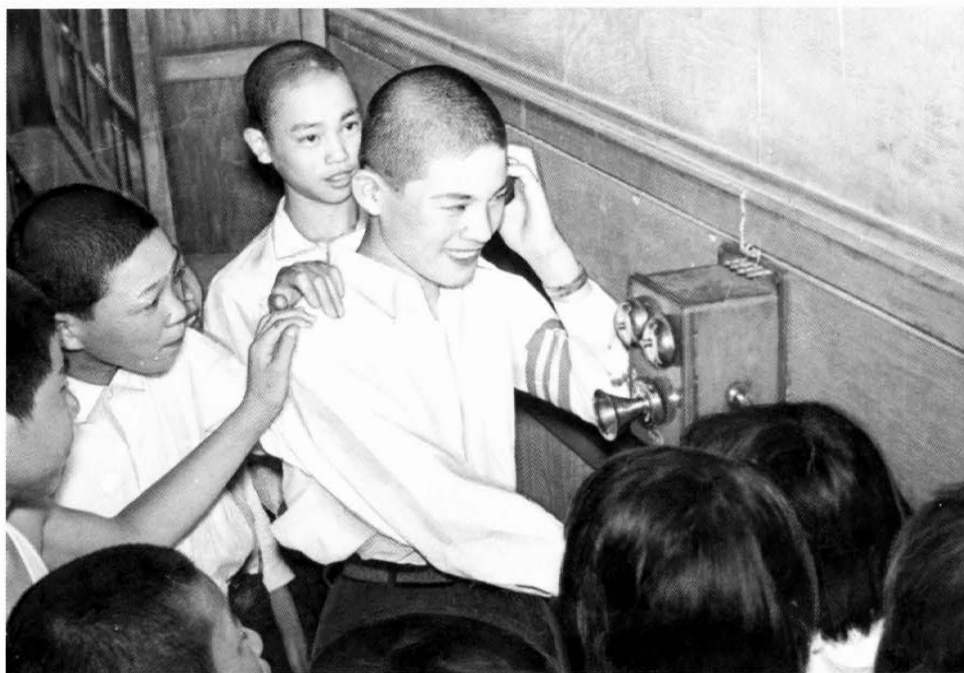
ところが練習に要する剣道具は竹刀しなひの一本もないので、子供たちは青竹を適当な長さに切って仕上げ、竹刀がわりに。また、青竹でたたかれてはたまらぬので、木にわらくくりつけた手製の人形がたたく相手。故に人呼んで「青竹剣法」という。だが子供たちはこの「質素？」な剣法にも大喜びで、毎晩練習に励んでいる。
(昭和31年8月12日)



青竹剣法の練習風景

中学校へ電話機

久万電報電話局はこのほど、上浮穴郡面河、小田両中学校に教材用として電話機二セットを贈った。これは電話の正しいかけ方を覚えてもらうために電電公社が毎年全国の学校に寄贈しているもので、面河中は職員室と職業科教室、小田中は職員室と理科室にそれぞれ取り付け、主に三年生の職業の勉強のときは校内の連絡に使っている。
(昭和33年7月25日)



贈り物の電話機でかけ方の練習をする面河中の生徒たち

「台風時でも大丈夫」

久万署で通信連絡訓練

このほど久万署と県警察本部の間で、台風時の通信訓練が行われた。想定は「三日午前七時二十分ごろ上浮穴郡面河村洪草集落に突然山くずれが起こり、家屋十五戸が全壊二名が生き埋めとなつて救出中。現在の風速三十メートル、雨量二百ミリ……」というもの。近づく台風シーズンに備えて、久万では台風時は暴風雨のため有線電話がほとんど途絶するので、これに代わる無線電信訓練が実施された。同署管内は「本県の屋根」といわれる山々に囲まれているため、無線電話もきかないので、もし有線が途絶した場合はこの無線電信が唯一の連絡方法となる。

(昭和30年8月4日)



台風来襲に備えての通信訓練

面河庁舎増築完成

笠方ダム関係事務所に

上浮穴郡面河村はさきごろから庁舎の増築を行っていたが、このほど完成した。二階建て木造モルタル塗り三十四坪、総工費百五十万円。階上三室、階下二室で、主として笠方ダム関係の事務所に当てる。(昭和33年8月27日)



増築なった役場

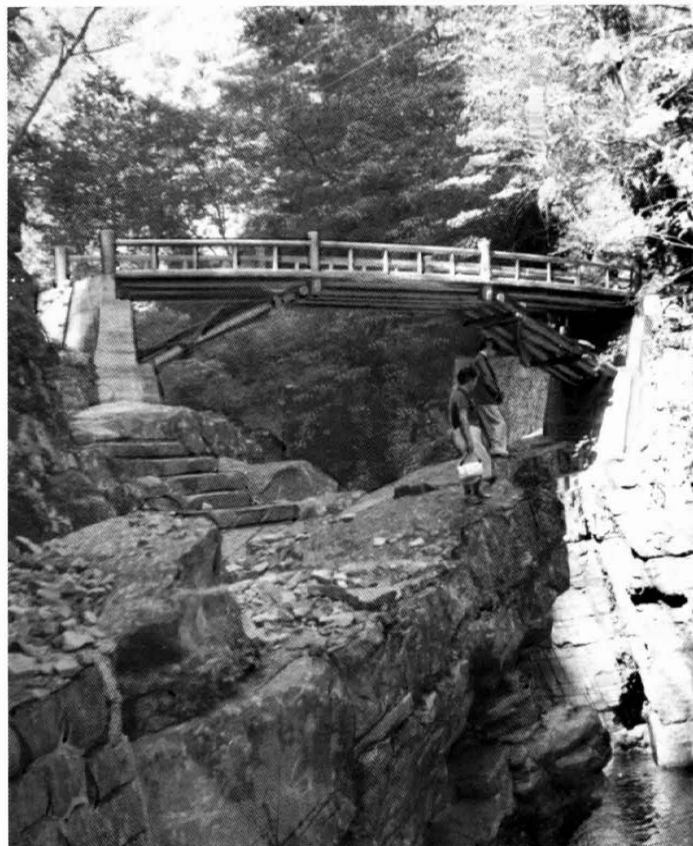


完成した川の子橋

面河の「川の子橋」完成

昨年十二月着工した上浮穴郡面河村川の子橋は、このほど総工費百五十万円（全額国庫）で完成した。木造長さ四〇・二メートル、幅三メートルで面河川に架かっているが、この橋は同村川の子開拓地（二十二戸）へ通じる開拓道路として架けられたもの。

（昭和31年6月15日）



完成した空船橋

面河の「空船橋」が復旧

名勝面河溪の玄関口、関門に架かっていた空船橋は、昨年秋の二十二号台風で流失したままになっていたが、このほど総工費三十万円で復旧した。この空船橋は旧観光道路に架かり、木造長さ二四・六メートル、幅二・三メートルで、増水による流失を防ぐため従来のものより一・七メートル高く架けられている。

（昭和31年6月13日）

親子航路・木地師小椋亀吉さん(六八)小椋孝行さん(三三)

伝統の火を消すな

後に続く「芸術」の担い手

亀吉さんが父親について木地師の仕事を習い始めたのが、十四、五歳のころ。当時、梅ヶ市地区ではほとんどの家で木地細工が行われていたが、今では亀吉さん方一軒となった。材料不足と農業が忙しくなったため、技術を受け継ぐ者が若い人に出ないのだ。亀吉さんは五十年間にわたって盆、菓子器、碁石入れ、茶道具などを作り続けてきたが「もう自分一人になったので自分が死んだら木地師も途絶えてしまう。何とかして残したい」と懸命に次男の孝行さんに教え込んでいる。

久万署渡草駐在所に残されている「名所旧跡史」によると、中御門天皇の享保元年ごろに木地師が入山してきたとされ、これら木地師は、文徳天皇の第二皇子、惟喬親王が近江愛知郡筒井邑の奥山に入って木地細工をはじめた時の侍従たちであると伝えられている。

「この二百年の伝統をもつ木地師を絶やすのは惜しい、郷土の芸術を残そう」という声が最近青年団の間で起こってきているが、亀吉さんはろくろを踏みながら「削るのは二年みっちりやったら覚えられるが、問題は道具(カンナ)を作る技術だ。これが長い間かかるから……」という。

十数本のカンナは全部鋼鉄を買ってきて、各人各様の力に体に合うように自分で焼いて、たいてい作り上げねばならない。ゲテモノ作りなら出来上がりカンナを買ってきてでも作れるが、一流の木地細工は自分に適応したカンナを使わぬと出来上がらない。ここらがろくろ機械による製品と異なる名人芸の域だろう。

「一番難しいのは碁石入れです。これは碁を打っている人が盤面をにらみながら碁石を出す時、つかまえなくても指で押えたまま、穴の内側に沿って出せるように作らねば碁石入れとはいえません……」。亀吉さんは奥義をチョッピリ語ったが、さらに本当の碁石入れなら「対に必ず高低があるという。これは低い方に黒石が入ることを示すもので、いちいちふたを開けなくても分かり、上位者と対局する場合、まず低い方を取るのが礼儀ということ。

また木地細工の材料はケヤキ、クワ、エンジュなどの大木だが、最近では原木不



ろくろを踏む亀吉さんと修業中の孝行さん

足という。明治維新までは官山に木地師は自由に立ち入りでき、自分の好む木を切つて細工することができたが、いまは払い下げを待つ程度。しかも原木は切つてから二十年ほど自然乾燥させておかぬと、ひびがきたりして「一流の木地はできないというから、材料集めも「苦勞」。

孝行さんは「子供のころからぼつぼつやつたが、まだおもちゃがやれる程度です。農業の暇にやっていたのでは本当に習えぬ。昔のように木地細工を家の仕事としてやれば早いだろうが……。だが、どうしても覚えようと思つていません」と、修行中の弁を語っている。深山に住む木地師の名人芸は今、消滅寸前にあるが、孝行さんや郷土の芸術を守ろうという青年たちの手で必ず受け継がれてゆくだろう。

(昭和31年7月3日)

幻灯で味噌造り普及

面河洪草の実習フィルムに

上浮穴農業普及事務所所川下支所では、幻灯を使用する立体的な方法で味噌の造り方の普及をはかろうと、八月二十七日面河村洪草婦人学校の実習風景をカラーフィルムに収めた。同地方で従来味噌と呼ばれていたのは「ひしお」のような液状のもので、普通味噌は麴をつくる際の温度調節が難しいことなどからほとんど作られていなかった。味噌ぐらいは自給自足で、という声が婦人の間に起こり、二宮生活改良普及員を招いて、普通味噌の造り方実習を行った。

普通味噌の造り方は、従来のように聞きながら実習するのは分かりにくいので、同婦人学級の実習を機会に、これを幻灯にして「見て聞いて作る」方法により、今後普及をはかることになったもので、最初から仕上がりまでの三十数時間の過程が同村農協組合長重見庄三郎さん(四)の手で計二十コマに収められた。

(昭和31年8月30日)



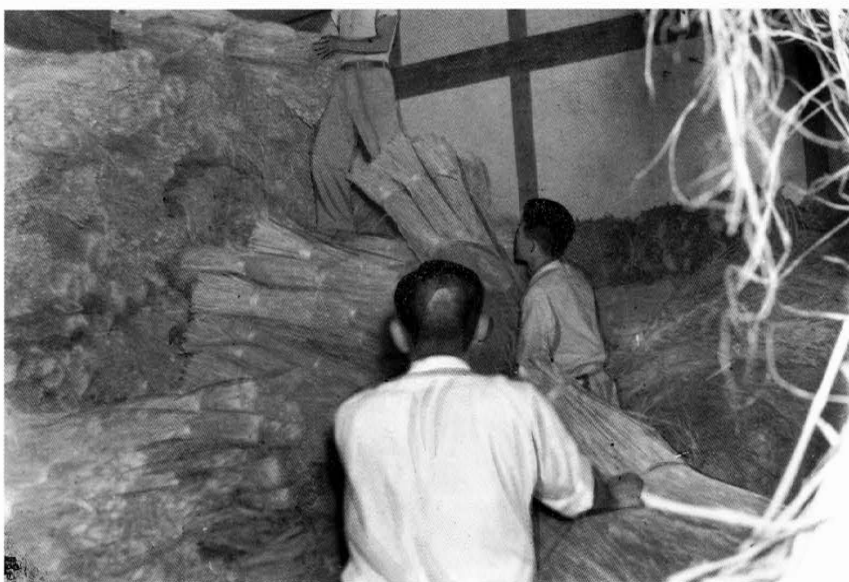
味噌造りの実習

倉庫に眠るミツマタ

三十二年度局納ミツマタは、買上げ価格をめぐり政府と生産者側の折合いがつかず、価格決定はまたも延期されそうだ。

このため納入開始が例年より二カ月も遅れているが、県下の主要生産地上浮穴郡では加工を終わったミツマタが、農協の倉庫に山積みされ、このところの農協とも、ミツマタのために完全に足を取られ、経営基盤の弱い同地方の組合には大きな痛手となっているようだ。

(昭和32年8月9日)



倉庫に積まれた局納ミツマタ(面河村農協)



麦まきの始まった面河地方

高原は麦まき

高原上浮穴郡ではもう麦まきが始まっている。先の寒波の不意打ちに驚いたように霜が下り始め、豊作を物語るように深く垂れて稲穂をしっかりとぬらす。

里より早い冬がもう目の前。このころになると高原では暖かい春を祈って麦まきが始まる。猫の額のような段畑、川縁の畑に青い芽が吹き出すまで、寒風に高原は閉ざされる。

(昭和32年10月26日)

ミツマタの加工始まる

局納ミツマタの納期を前に、主産地・上浮穴郡では一斉にミツマタの加工が始まった。刈り取った原木を大きな釜で蒸して皮をはぎ、黒い麦皮を除いて乾かしたあと、水にさらしてやっと仕上げとなる。工程はなかなか骨の折れる仕事だが、皮はぎ、水洗いはおもに婦人の役目。元気にひざまで川に入って水洗いに精を出す乙女たちの額に汗がにじむ。だがさすがに水はまだ冷たそう。竿に干した真っ白な繊維がさらさらと晩春の風を呼ぶ。

(昭和33年4月29日)



ミツマタをさらす乙女たち(面河村西之谷で)

自然「ひんやりささやく」

奥山に住む清流の主

上浮穴郡でも奥地、人跡まれな谷川の清流にすんでいるのがハコネサンショウウオ。体は頭の長さの約四倍、十七センチほどだというからまずはやモリよりやや大きい。水から出て陸に上ることはあるが長時間は無理。捕ろうとして手を水に入れると、食いついてくるあたり、小柄にしては闘志満々。奥山にひっそり住む清流の主である。

(昭和30年7月7日)



面河のサンショウウオ

まるで空中ブランコ

ヒンヤリ20度の冷氣

板子一枚——ならぬロープ一本に身を託して、百数十回の岩壁をそりりそりりとほう「イワタケ採り」は、スリルと涼味あふれる商売だ。石鎚山の尾根伝い、幽谷で名高い上浮穴郡面河溪は、屹立する断崖の各所にイワタケ(岩茸)が覆うように黒ずんで寄生している。成長するのに二十年から三十年、これくらいで料理に供される。

同郡面河村岩山の菅明光さん(三)は父本次郎さん(六)の跡を継いで、二十二、三歳ごろから岩肌と勝負している数少ないイワタケ採りの一人。シユロの命綱で絶壁を降りながら、イワタケを手

製のナイフで削り取り腰の袋に手早く入れ、上下あるいは左右に青空舞台のスリリングなパントマイムを演じる。足元は二十度の冷氣に包まれて

大粒の霧が重く静かに流れ、そのペールがはがれると斧を入れないスギ、ヒノキの木立、白骨林が地獄の針山のように人待顔。岩をかむ激流もはるか彼方でかすかな音楽を奏でている。時には、谷間を吹き上げる突風で足場がぐらついて空中ブランコよろしくヒンヤリ——。しかし商売ともなればはた目ほど怖くはないそう、言葉借りれば「高さの概念は全く不感症になった」。タフガイである。

(昭和33年7月17日)



命綱一本。下は地獄のイワタケ採り



関門前広場を埋めた自動車群

どつと最高の人出

紅葉客でにぎわう

上浮穴郡の名勝面河溪は、二十三日、紅葉客第一陣がどつと押し寄せて終日にぎわった。この日面河溪関門に集まった貸し切りバス、ハイヤーなどは合計六十台におよび、県内はもちろん香川、高知方面からも駆け付けて、今秋最高の人出千五百人を記録。このため関門での交通渋滞で、交通整理に当たる久万署員は汗だくで大わらわ。

一方、家族連れ、アベック色取り取りの観光客は、そこかしこで紅葉と清流の渓谷を楽しんでいたが、中には酔っ払って赤い気炎を上げる勇敢なる女性も現われて、日ごろ静かな渓谷は大変なにぎわい。

(昭和30年10月24日)

面河へ観光バス80台 今が見ごろの紅葉嘆賞

面河の紅葉は今が一番見ごろ。一日の日曜日には松山、今治、宇和島、遠くは高知方面から観光バスが繰り込み、面河の入り口関門広場はバスで埋まった。

この日、雨とはいえ、県内外から面河目指してやつてきた観光バスはざつと八十台。家族連れで白ナンバーを飛ばしてきた豪華版も七、八十台はあろうか。上浮穴郡美川村御三戸から面河川の溪流に沿ってバスで登ること約一時間、秋雨煙る中を、雪のように白い滝と深紅に染まったカエデ、ハゼ、雑木の色合いが美しいコントラストを描きながら、車窓に映るのを見れば、誰もがしばし世間の雑事を忘れて、この天然の美をめぐることだろう。

あいにくの雨で、旅館や休憩所は超満員でホクホクだが、すっかり当てのはずれたのは観光客。それでもズボンや着物のすそを折り上げて、雨の中三々五々黒く突き出た奇石や濃紺の淵、石畳にたたえられた鏡のような水に映る紅葉を嘆賞していたが、中には「このバス置き場はなんとかならんのだろうか」「昨年は車の置き場を作るようにと県から補助がきたのに地元での裏付け財源がないため返上したそうなど、毎年のことながら車の置き場のないのを嘆く声がしきり。

狭いところに押し込められた百数十台のバスやハイヤーはもう身動きができず関門広場は大混雑。奥に入った車は外に出るのに二汗。久万署から派遣された数人の交通係も雨の中を車さばきに一汗懸命だった。

(昭和34年11月2日)



関門広場を埋めた観光バス

亀腹で新「風穴」発見

発芽を抑えなければならぬ植物種子や蚕紙の貯蔵に利用されるばかりでなく、観光面からも重要視されている風穴（風渦）が、先ごろ上浮穴郡面河村亀腹で中川愛美さん（四七）と同村関門、山の家管理者Ⅱによって発見された。問題の風穴は中川さんが、六月十二日現場付近に石鍬簡易博物館（仮称）を建設のため、高知管林局と協力して実地測量中、足もとに異常な冷気を感じ、コケを除いたところ、風穴らしいものにぶつかつたもので、亀腹から鶴ヶ背橋を渡つてすぐの左側に、直径約一尺半にわたつて、重さ約三貫目の安山岩が折り重なつて作られていた。同村の大成の風穴に次いで、面河で発見された二番目の風穴である。

（昭和30年7月6日）



新しく発見された面河の風穴

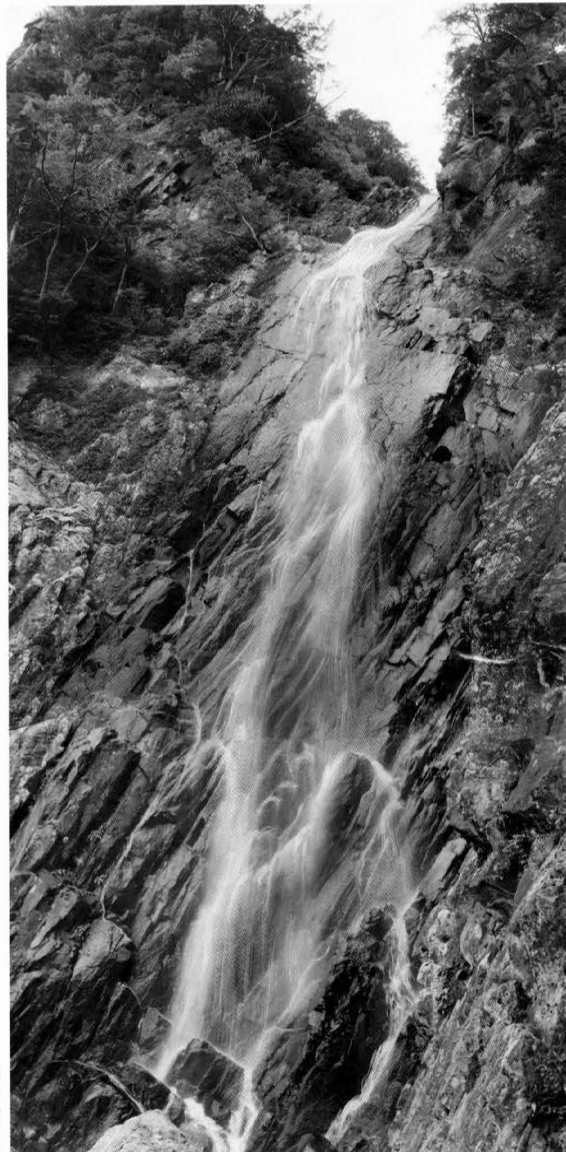
肌に迫る冷気

石鍬山「御来光の滝」

石鍬山頂の南、新緑のブナ原林の間にそそり立つ安山岩の絶壁が滝の轟に震える。標高約千六百尺、石鍬山系では最高地の滝だといふこの「御来光の滝」は、面河亀腹から溪谷沿いに入ること約三時間、面河山と天狗岳とが作る谷間の最終地に岩の奇、水の青、森林の美の景勝三要素を誇

る。六十尺の岩間からくの字型に落ちる水の束が随所に突き出た岩肌弾けて飛沫と散り、あたり二面に絶えず霧雨を降らす。天狗岳の反対側から上る太陽が稜線の立木を通して、一瞬、幾条もの光の矢を投げかけると、飛沫に七色の虹の橋が架けられ、神の使いの白蛇にも似た滝のくねりと肌にしむ冷気は神秘の雲に達する。

（昭和30年7月1日）



御来光の滝

石鎚調査始まる

昆虫班など好調のスタート

一週間にわたり西日本最高峰の石鎚山一帯を動植物、地質、民俗地理などあらゆる角度から総合調査する、県、愛媛新聞社共催の石鎚山系総合学術調査団は二十日朝、松山市を出発、直ちに予定の調査日程に入ったが、調査第一日にツノクロツヤマシの幼、成虫を捕獲、生態写真の撮影に成功するなど貴重な成果を挙げた。

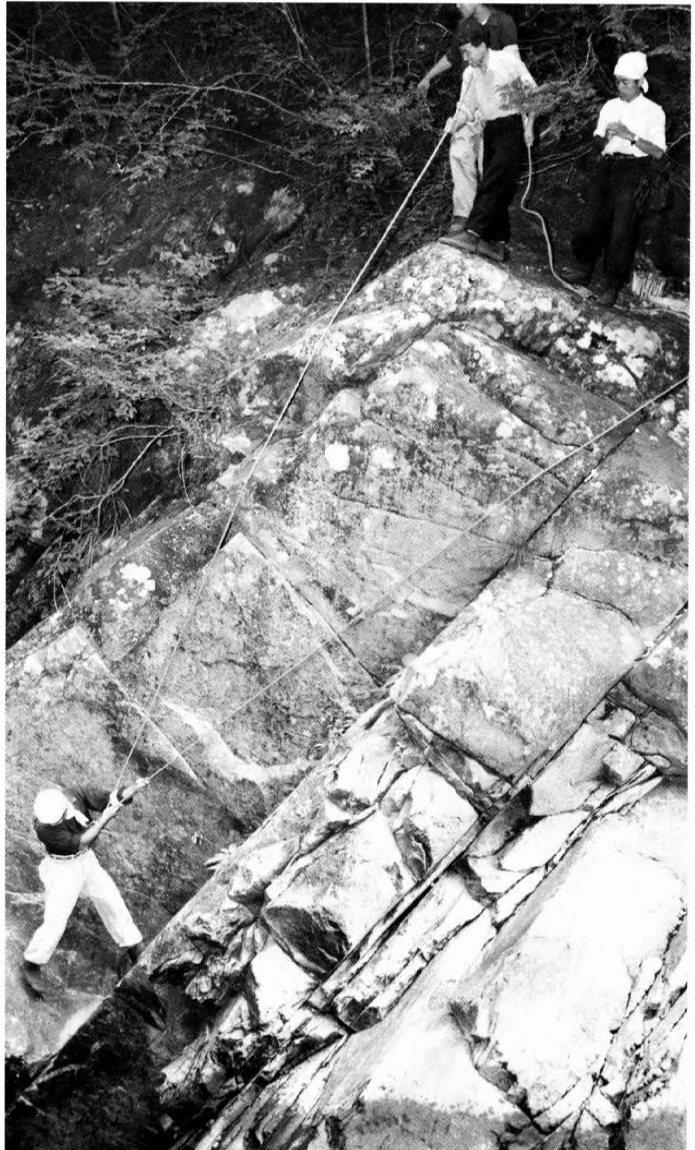


亀腹の岩に生えるフルラニア・バドローサ

「隠れた滝」実測

一面河溪のヒゲラシの声に迎えられた調査団一行は、午後三時半溪谷の奥へとわけ入り調査を開始した。Aパーティーは鉄砲石川出合付近を踏査、けやき山谷の滝が面河溪二の懸谷滝であることを確認、また昆虫班は天然記念物ツノクロツヤマシの生態を明らかにするなど、幸先よいスタートを切った。

西条市河口へ向かった二行約八十人は、午後二時十五分面河溪に到着、溪泉亭に調査団本部をおき、午後三時すぎから各班ごとに調査、設営に取り掛かった。Aパーティーは愛大助教授山内浩班長をリーダーに、六人が鉄砲石川出合付近を



鉄砲石川の溪谷を調査する調査団員

調査した。

動物、植物、昆虫、野鳥の各班は鉄砲石川、面河溪本流方面の生物を調査した。昆虫班は日本特産として四国の中央山脈にすむ、熱帯系昆虫ツノクロツヤマシの成虫と幼虫を発見、その生態写真を撮った。成虫と幼虫が生きたまま採取されその生態写真が撮れたことは学界で初めて。

地質班Bパーティー四人は、通仙橋から本隊と別れ、板瀬谷へとわけ入りキャンプして谷の地質調査を開始した。また探検班Bパーティー十人は測量機械など重い荷物を愛大小屋へ担ぎ上げた。

(昭和33年7月21日)

面河「教育キャンプ」で遭難

高校生、激流に転落。けさ番匠谷付近で

二十三日朝、上浮穴郡面河村面河溪付近へキャンプに来ていた松山工業高校生徒のうち、松山市湊町、松山市議仲川幸男氏長男、三年生仲川卓志君（七）が、面河溪関門から約一里奥の番匠谷付近で足を滑らし、川の中に落ち込み行方不明となった。届け出により、久万署員および同村消防団員らが捜索に急行したが、現場付近は水深が深く流れも急流なもようので絶望視されている。仲川卓志君は同校土木科二年生二人と同行していた。なお同キャンプは県教育委員会、本社主催の教育キャンプ指導者講習会で、二十二日から二十五日まで三泊四日の日程で行われていた。このキャンプの指導者の一人として、松山工業高校教師で高体連山岳部長、滝沢新三郎氏も同行している。

（昭和30年7月23日）



樹間の慰霊祭で祭文を読む土屋大会委員長（中央）

高校登山遭難者初の合同慰霊祭

亡き友の思い出に新たに「雪山賛歌」も悲し

「27人の霊安かれ」代表選手ら300人参加

全国初の高校登山遭難者合同慰霊祭は、予定より一日遅れて十四日午前十時から上浮穴郡面河村石鎚山登山口付近の蓬萊溪で、第三回全国高校登山大会出場の代表選手、役員ら約三百人が参加して行われ、厳かなうちにも山を愛するものの集いだけに、遭難者を悼む愛情にあふれた雰囲気漂わせていた。

この蓬萊溪は、本県からこの慰霊祭に合祀ごうしされる仲川卓志君（当時松山工三年生）と、この大会の登山隊長を務める滝沢新三郎氏（松山工教諭）がかつてキャンプをした、ブナ、ヒノキのうっそうたる樹林地帯の台地。この台地の角に北向きに、松山から持参した慰霊塔が建てられた。慰霊祭は、まず昭和二十四年以來の高校遭難生二十七人の氏名を発表、全員黙とう、土屋大会委員長（八）の祭文朗読、遺族を代表して仲川卓志君の妹、仲川悦子さん、友人代表藤田愛也君（二）、各コース隊長らが野花で作った花束をささげ、滝沢隊長の「最も敬愛する仲川君……」と、同君をしのぶ涙を含んだあいさつがあり、全員が「雪よ岩よ……」の雪山賛歌の合唱に移った。

上浮穴高生らが接待

第三回全国高校登山大会の選手団のうち三コースは十四日午後零時半、十四台の貸し切りバスで面河関門を出発、松山に向かったが、この途中、上浮穴郡久万町の上浮穴高校に休憩のため立ち寄った。同校では男子生徒がテント張りの休憩場を作り、女子生徒は湯茶の接待につとめた。

（昭和34年8月15日）

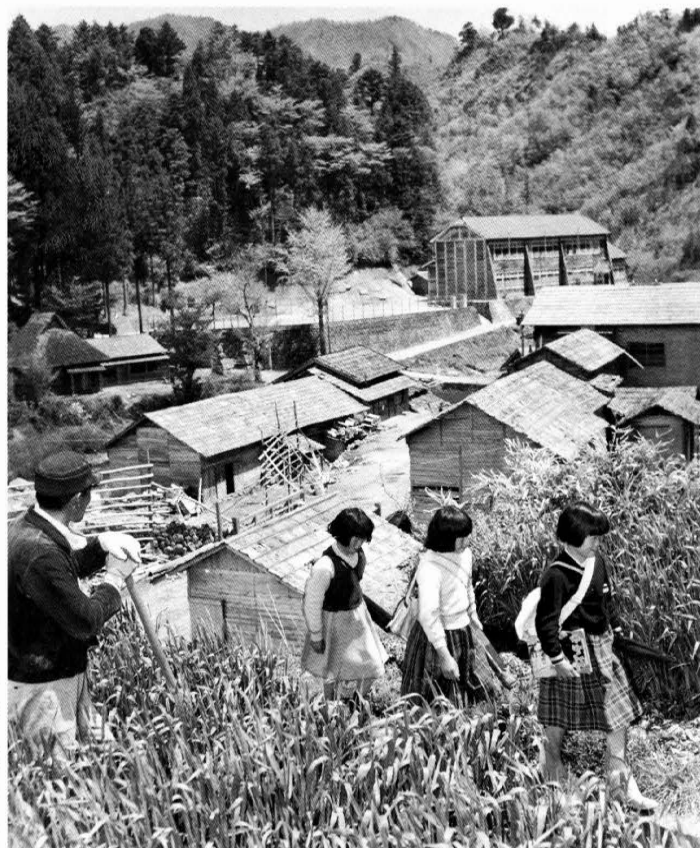
中予新風土記シリーズ⑤

百二町歩の大人造湖

面河川の水を逆流させる

「沈む第三の集落」を出そうとしているのが、いま設計調査の進められている上浮穴郡面河村笠方ダムである。道前道後平野農業水利改良事業の話が持ち上がったのは二十六年。翌二十七年から早速農林省岡山農地事務局が下調査に乗りだし、三十二年度はさる一日からいよいよ本格的な実施設計調査が始められている。何しろ四国山脈の南ろくを流れて太平洋に入る面河川（下流は仁淀川）の水をためて、四国山脈北側の道前、道後平野二万二千余町歩を、水系のまったく異なる水で潤そうというのだから、その規模のほどもちがいが知れる。この「第三のダム」は、正式な着工時期は未定であるものの、すでに建設は、実施設計調査の始まった今日、確定も同然で、同郡町村会では四月に挙郡一致での協力態勢を打ち出している。また湖底に沈む地元笠方集落でも、一部に反対者はいるものの、大部分は了承しているといわれ、着工の際には多少のイザコザがあるかもしれぬが、現状では地元協力態勢はすでに二応出来上がっている。

同集落は、山また山に取り囲まれている面河村の穀倉地帯で、計画通りになれば水田百三十二町歩、畑百四反歩をはじめ、山林、原野、宅地など六百五十反歩余りが水没。とくに田畑はほとんど全滅するので、年間米三百六十石、麦百六十石、雑穀二百石の減収となり、山村としては経済的に大きな打撃をうけるが、目的が目的だけに涙をのんで協力することになったもの。また水没は田畑にとどまらない。笠方小学校、農協をはじめ民家など合計六十四戸、同集落の約半数が湖底に沈んで故郷を失ってしまう。これらの人々は建設が決定すれば、やはりいままでの水没集落同様補償金を懐に、新天地を求めて住まいを移さねばならぬわけ。そのあとには総貯水量二千五十万立方尺、満水面積百二町歩という大人造湖が出現する。（昭和31年5月8日）



湖底に沈む笠方小学校と民家

35年の難工事に凱歌がいか

松山―黒森峠―柚川線ついに完成

海拔二千以上の黒森峠を越えて、上浮穴郡面河村と温泉郡川内町を結ぶ県道松山―柚川線(面河川奥橋から川内則之内集落まで二十九キ)が着工以來、実に三十五年ぶりに完成、十二月八日、その開通式が黒森峠で両町村の共催により盛大に催される。同県道は、沿線帯の豊富な林産物搬出道路としての重要性をもっているのはもちろん、建設を予定される笠方ダムや名勝面河溪谷など、大観光地を控えているので、観光面からもその早急な開通が望まれていた。

同線の設置を最初に提唱したのは、元三内村長の近藤金四郎氏(昨年死亡)で、大正十年五月二十五日県道として認定された。当時は川内町音田集落までしか通じておらず、音田集落から黒森峠を経て面河村葦草土泥、川奥橋間を結び、松山―柚川線とするため同年から直ちに着工された。だが県



開通した松山―柚川線の黒森峠付近

費が地元の思うように支出されなかったことと、海拔二千以上の黒森峠を越える難工事であったため、工事はとかく遅れがちで、終戦直前には、面河村に関する同線の一部が軍用道路として軍隊の手で工事が行われたりした。続いて終戦後は、県単事業で継続され、昨年七月全通したものの、台風などで各所に発生した山崩れなどが放置されていたので、さらに災害復旧を行い、ついにこのほど完通したものの。

この新路線の完成によって、面河村役場から松山市への距離は、従来の久万町を経由する場合にくらべ十余キ短縮された。さらに現在工事中の同郡美川村仕七川から高知県池川町へ通じる県道小田―池川線が開通、同線と連絡すれば松山―高知間の最短連絡道路にもなると面河村では語っている。また同村から東予方面へ行く場合は、松山市を経ずに桜三里越えが可能となるので、時間にして一時間半以上も短縮される。

(昭和31年12月7日)

笠方ダムやつと測量開始

「機動力」お山を征服

33年度には部分着工

道前道後平野二万二千三百町歩を潤す笠方ダム(上浮穴郡面河村)の測量は、三十二年でほとんど終わり、翌三十二年行われる予定の地質調査によつて設計書が出来上がるという最終段階に入っている。

同ダムはさる二十六年から調査が続けられてきたが、千二十万円という調査費が計上されて大がかりな測量が始まったのは今年度から。十数名の測量隊がジープ、乗用車、単車、スクーターと各種機動力をもつて現地に入ったのはさる五月だったが、道後平野と面河村を見下ろす海拔二千余の黒森峠に、まず同ダム測量の基本になる視標(視標)が高さ約十の檜の上のに完成したのをはじめ、現在までに面河溪関門からダムサイト―上黒森峠―温泉郡川内村間屋部落までの間に、約三十の視標が立てられた。測量隊はこの視標をもとに日曜日にも休まぬ強行軍の各種測量を続けているが、地元の人たち約三十人も今年から作業に従事している。静かだった集落は、走り回るこれら測量隊と道端や、峰々に立てられた赤白の派手な視標、その視標の位置を示す同じ赤白のはためく旗などで、急にダム建設地らしいあわただしい動きが見え始めている。

今年度実施される測量は、貯水池、ダムサイトの地形から始まって、承水トンネル、貯水池、放水路を結ぶ三角測量、道路つけ替え、および工用道路の測量、放水路、分水路線の測量、道後平野表側水せき築造地点(桜三里)、および道後南北幹線水路測量などで、これで測量は九割方終わる。翌三十二年度は周桑郡の平野部での水路など、残りの測量と同時に地質調査も行われ、この地質調査でも七年間にわたる全調査が終わって、設計書が出来上がる。係員の話では「順調にいけば、三十三年度には少なくとも部分着工の運びとなるだろう」ということ。

(昭和31年6月21日)



ダムサイトで働く山の乙女たち



黒森峠に建てられた視標